

エクアドル通信

番場 猛夫

南米エクアドルの国情については 先年訪エした竹田技官の報告(地質ニュース No. 109, 110)ならびに森本良平氏のかきものなどがあり およみになった方も多いことと思われる。しかしながら発展期にある中南米諸国のあゆみは誠に激しく 上記の報告はすでに旧聞に属することになるかもしれない。私はたまたま機会をえて1965年6月までエ国に滞在予定で 現在エクアドル国立地質調査所において技術協力の任務についている。すでに訪エしてから半年になりいろいろと貴重な体験をつむことができた。はじめに述べたように 現地の事情は刻々変化を示しているので 帰国の上での報告よりは現地からの通信によって新鮮味のあるところを報告する。

1. はじめに

日本と中南米諸国間との技術協力計画にもとづいて地質学とくに鉱床学の専門家としてエクアドル国へ派遣(任期1年)を命ぜられ 東京で1カ月間スペイン語の強制訓練を受けたのち 1964年6月20日の深夜 単身羽田を発った次第であるが 任務の内容は漠たるもので 前任者の安達(野村鉱業) 竹田(地質調査所) 森本(東大)の3氏からもはっきりしたことはうかがえなかった。要するにひどくおけている国であるから 自分で方針を立ててやってゆくより仕方がないだろうということである。心ひそかに アンデス山脈の断面をつくってみようと雄大な夢を描いたものである。私のたつての希望で 日本光学KK製の偏光顕微鏡と反射装置 それに薄片製作器具一式を持参することを O. T. C. A. (海外技術協力事業団) が認めてくれたことは 何よりも心強く

うれいことであつた。上記の物品は船につんでもらうこととし 私は一通りの調査道具を携行しただけで1年間の出張としては身軽なでたちといつてよかつた。

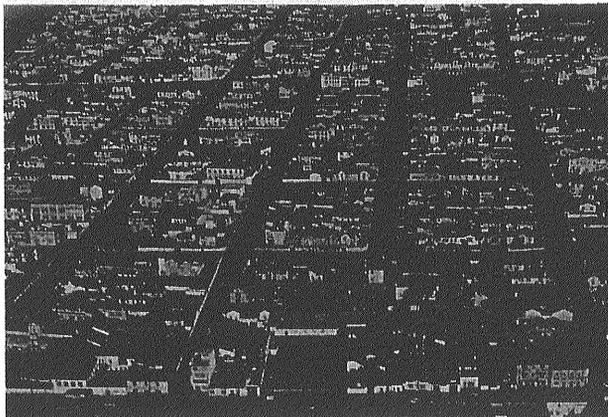
目的地のキトー(エクアドルの首都)には 東京発後54時間の22日午後4時半(現地時間)に到着した。大使館からも出迎えて頂き とまどうこともなく まずは順調なスタートをすることができた。

2. その後のエクアドル

エクアドルの政治は1年ほど前から軍政委員会が担当していることはご存知のことと思うが その目標は

1. 農地制度の改革
2. 税制度の改革
3. 大統領選挙法の改正

の3点にあつたということである。従来の政治は一部の金持ちの私有物であつたために 一般民衆にはうろたひのない腐敗政治といわれていたということである。軍は民衆の期待をになつて政治をあずかることとなつたが 発足に當つて「軍は好んで政治を担当するわけではない 上記の3点が解決すれば速やかに政党政治にもどすであろう」という宣言をしていることは注目に値する。新政権は直ちに農地改革をなしとげたのではあるが この政治体制も古くからの伝統があるわけではなく しばしば危機を迎えているわけである。今年に入つてからもキトー国立大学の学生を中心とする反軍政デモがあり 政府は催涙弾を用いてそれを鎮圧したあと 大学の長期閉鎖を断行した。また10月初旬には税制度の改革に関連して生じた政府転覆計画があり 主謀者であるグァヤキル市の市会議員 学生などを本土から1000kmも離れた太平洋上の孤島 ガラパゴス島に流刑に処したのであるが 流刑者を乗せた船がガラパゴス島に向いつつあるとき 軍は民衆との離間をおそれて 一步をゆずり 円満な解決をみた。ところが10月末にグァヤキル市で開



上空からみたキトー市新市街



キトー市旧市街

かれた国際バナナ会議の際に その議長をつとめていた 勸業省大臣を「軍政委員会に対する忠誠に欠けるところがある」との理由のもとに突如更迭してしまった。

それは会議に出席していた世界各国の代表にかなりのショックとひんしゅくとを与えたものといわれる。勸業省大臣の更迭と前後して 鉱山局長のセバジョース氏も更迭され 陸軍大佐の新局長が就任した。

わずか半年の間にこのような経過をたどっているのであるが 中南米諸国の革命さわぎは常態化して 国民に与えるショックは われわれが考えるほどのものではなく たいした話題にものぼらないのである。現にボリビアでは 学生を中心とする革命軍と政府とが40名もの死者を出して流血の惨事を演じている最中である。このような情勢下で 9月24日にはフランスの大統領ドゴールが国賓として迎えられた。その日は朝から祝砲が鳴りわたり 官公庁 会社は一斉に休日となり 沿道にドゴールを迎えたのである。エクアドルにヨーロッパの元首が来訪したのは有史以来のことだと聞いた。当日は町の広場に大群集が詰めかけ 夜は花火が打上げられ 伝統を誇るカトリックの教会の鐘はドゴールの休養のために1日中鳴らすことができなかった。とにかくその歓迎ぶりは大へんなものであった。ドゴールは米ソ2大勢力に対抗して中南米諸国に第3勢力を樹立することを旗印にかかげて 中南米諸国の歴訪に立ったといわれているが フランスを含めてのラテン民族の意志の統一という点では 血のつながりで全面的共鳴をよんだものの これに伴う経済力の弱体化～第3勢力の樹立に伴って アメリカ合衆国からの従来の経済援助は当然打ち切られるであろうことをおそれて 中南米諸国あげてドゴール案に不賛成の意を表して幕切れとなった。

さて日本とエクアドルとの関係であるが まずは友好的であるといつてよい。とにかく一昨年度に 日本国民は3000万ドル(100億円)という大量のバナナをエクア

ドルから買ったのである。これは米国に次いで世界で2番目のお得意先である。この輸出額は エクアドルの経済に重要な役割りを果たしていることはもちろんである。バナナの輸出でその命脈を支えているエクアドルにとって 日本はありがたい国なのである。私がこちらに着任した際 勸業省次官のフレレ氏は私を抱かばかりに迎えてくれたが それはバナナのなせる業かと思われるのである。日本の地質学が高度であるからなどといい気になってはならぬのである。それに関連して面白い話がある。最近日本のバナナ業者の親方がエクアドルに招かれ大へんな歓迎をうけた。ドゴールののった車で各地を引き回されたあげく 今後の買付を頼まれたわけであるが 日本には台湾バナナの攻勢があつて 今後は今までのようにはゆかぬ情勢にあり 引込みがつかなくなつてしまったということだ。義理人情にあつい親方が赤字覚悟で船を出し 散々な目にあつて日本に引き上げたのはごく最近の話である。

町にはカメラ ラジオ 衣類とくに作業衣用綿布 日用雑貨品など日本製品がかなり出回つてはいるが それらの輸入額はバナナの輸出額の比ではないのである。

以上のエクアドルの政治経済の一端にふれてみたが 鉱工業の開発がおくれているので 金属製品 機械類はすべて輸入品でとつてもなく高価である。石油だけは国産でまかなわれており ガソリンが日本の半額であることはむしろ驚異である。電気 ガス 水道 バスといった公共料金は意外に安い。これは国民の経済力が乏しいので 値上げができずにいるためといわれているが 関係会社と政府とはかなりの赤字をかぶつていのであるまいか。

3. 在エクアドル邦人と邦人の往来

首都キトーには日本大使をはじめ3人の館員がつめており 日エ両国のかけ橋となっている。不案内な私に対しても実によく面会をみてくれる。政治経済に関す



エヒーロード公園通り(キトー新市街)



キトー旧市街のラロンダの通り

る新聞論調の解説の労をとってくれるのをはじめとして珍しい行事があれば誘ってくれるし、こちらが日本語と日本食に飢えている頃を見はからって招いてもくれる。祖国を遠く離れたエクアドルも、小規模ながら楽しくゆたかな日本人の世界がある。また中南米の在留邦人向けに日本語のラジオ放送を分担している尾崎夫妻がいる。これはFM放送であるので、一般のラジオでは聴取できない番組である。このほか、キトーの西方130kmのサントドミンゴにはF社の作業場があり、ここに10人の日本人が入植し、現地の植物(バナナの類)の繊維を利用してロープの製造を行なって成功を収めている。グアヤキルにはK水産会社の出張所があり、最近K氏が所長に就任し、漁獲と加工とが行なわれている。このほか日本の自動車会社(T社、N社)の販売店があるが、今は日本人の駐在員はおかれていない。日本の車は大へん好評である。しかしながら一旦故障を起こすと、交換部品がないのでえらい目にあうのである。この悪評に 대응して近々N社がエクアドルに修理工場と日本人技術員をおくと聞いたが、これはヒットである。日本技術の信頼を高める意味でぜひ実現してほしいことだ。

最近日本人のエクアドル訪問が頻繁のようである。技術関係では日本工営株式会社社長を先頭にして部課長クラス7名による視察があった。これは低開発国の工業振興のための事業として、水力発電とそれを動力源としての化学工業を進めることの可否を検討することになった。エクアドルの地質調査所にも資料をとり、境田正宣氏(地質)が見えた。それと前後してエクアドルに日本の時計工場を開発して、今は国民の高嶺の花である時計の普及を計ろうと、N精密機械のK氏が見えた。年内にも事業に着手できそうなムードである。また日本の農機具の売込みに見えたI氏はエクアドル全土を1カ月視察し、土壌の性質を調べ、それに適するように在来の農機具に改良を加えて日本から輸出することになったよして、いずれもエクアドル政府からは大いに期待が

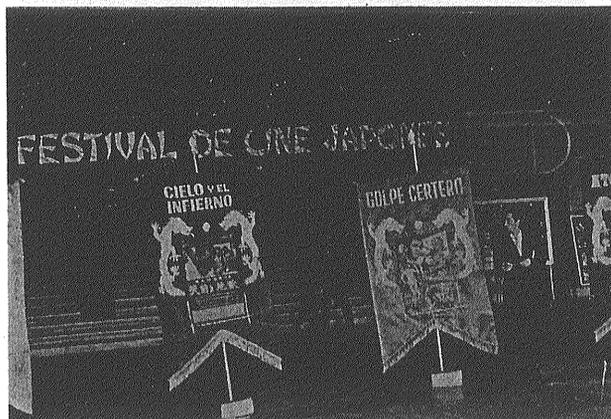
かけられている。これらの日本人諸氏に対するエ国政府の歓迎ぶりは常に大へんなものである。

芸能関係では10月初旬に日本映画祭が開幕され、5日間にわたって「天国と地獄」「さむらい」「ビスマルク砲台攻撃」などのシネマスコープがキトー、グアヤキル両市で盛況のうちに終了した。その後、東京オーケストラ一行による音楽の夕がキトーホテルで開かれたが、これも評判は上々だったと聞いている。このほか早大登山隊が10数名でやってきたり、東京外語大スペイン語科の女子学生3名がスペイン語の現地訓練をかねて、夏休みを利用して来遊するなど、エクアドルと日本との距離は短くなったと感ぜざるをえない。

4. 地質調査所の設立とその前後

私が受け入れ先であるエクアドル国の勸業省鉱山局の門をくぐったのは、到着翌日の6月23日の午前10時である。最近勸業省本館の建物が手ぎまになって、この6月に鉱山局だけが別館に移っていた。別館は本館の北方1kmあまりのところであり、4階建の近代的ビルで美しい庭もそなえている。その日は大使館の大川氏が案内と通訳をかねてくれた。局長のセバジョース氏は旅の労をねぎらってくれたらうえ、おおげさに親日家ぶりを説いてわれわれを面食らわせた。そのあとで勸業省次官のフレレ氏のもとに挨拶に出かけたが、ここでは開口一番「番場博士とはエクアドル人同志のつき合いをしたいので、早くスペイン語になれてほしい。そのためには日本大使館に近寄らないこと、大川氏も通訳は今日限りに願いたい」と冗談まじりに好意を示してくれた。ところで一向に仕事のことにはふれてこない。

さて翌24日、鉱山局に出勤すると、新しい机と椅子が3階に用意されており、隣には英語の話せるタイピストがスペイン語の教師を命ぜられましたと控えていた。今日からは通訳なしである。鉱山局長の案内でひとりひとり局員に挨拶をすませて、直ちに実態の把握にとりか



日本映画祭(キトー国立大学講堂)



アンデス山脈(西部山脈)

かった。最近 鉱山局の1部門であった地質部が局に昇格して私はその地質局所属であること。地質局長はまだきまっていないので 鉱山局長がかねていること。地質局の組織と人選とはフランスからきているオランジェという地質屋が立案していること。この建物の1, 2階が鉱山局で 3, 4階が地質局であること 現在地質局には地化学のオロスコ 地球物理のアローバ 地質学のエレラ(キトー大学地質学科教授を兼務)のほか 航空写真のローラン(フランスからの技術協力で最近やってきた地質屋)がいること。エレラだけは10年前から鉱山局員であったが 他は全部新人でこの6月に採用されたこと。オロスコはパリ留学から アローバはサンチャゴ留学から それぞれ帰国したばかりであること。なども知ることができた。なるほどこれでは私のテーマについて話がでなかったのも当然の情勢であるとわかった。これは面白い時期にやってきたものだとひそかに快心の思いであった。

物珍しく過しているうちに10日間がすぎて 7月3日になると新しい地質局長が就任した。その名をアドムンド・ラナス(Admund Lanas)という。専門は鉱物学で 前歴はチリー大学に学んだのち ラタクング(キトーより南方100kmの小都市)でガラス繊維をつくる工場を経営していたという。次々に履歴書持参で局長室に呼ばれ 専門は何か 業績に何があるか 何がしたいか等のヒヤリングである。私も英文の履歴書をたずさえて局長室を訪問したが 局長はこのときはじめて日エ両国間の技術協力計画のことを知ったらしい。ラナスは英語も堪能なので このときは英語で応答した。専門は何かと聞かれたので 造山帯に関する諸問題全般におよぶと即座に答えた。下手に金属鉱床学などといったら 作業範囲がせばめられぬとも限らない。こちらはアンデスをひとわり歩いてみたいわけだ 何はともあれ 私は到着したばかりだし 海拔3000mの気圧になれなくてはならぬし スペイン語の勉強もしなければ

ならぬ。ここ2 3カ月はそういうことで図書室にある文献を読んでいた。研究テーマはいずれ相談したいと申しでたら もっともだと快諾をうけた。

ラナスが就任して間もなく こちらの新聞に国立地質調査所発足するという見出しで 「設立を急いでいた地質調査所はいろいろの障害のために予定よりかなりおくられて発足したが その使命は重大である。このような組織ができた以上はエ国の開発のためにしっかりやってほしいものである。いつものような機構いじりに終わらないように」といった調子のものが掲載された。地質局というのは 地質調査所設立のための暫定的組織であったとはじめて理解した次第である。そして建物にかかっていた “Dirección General de Geología” ははずされ そこにひときわ立派な金文字で “Servicio Nacional de Geología y minería” の標札がかかげられ。鉱山地質学専攻のモスケラ 燃料地質専攻のノビリオ(ベネズエラ) 分析化学のバリガー 同じくシルバー等が就任し 組織づくりの任を終えたフランスのオランジェは帰国した。

組織が新しくなり 予算が決定され にわかにあわただしくなっていく。所員の部屋わり 購入備品の買入れ計画 フィールドの相談というわけで3階中にラナスのかんだかい声がひびいている。4台のタイプライターは計画書類をつくるのに休むことがない。私も購入予定の図書のリスト作りや 研究備品の品定め相談にあずかるようになった。石工室の設計をして 1階を大幅に獲得したのはこのときである。このときはじめて日本政府から薄片製作器具一式と偏光顕微鏡等が寄贈の条件で到着すると所長に打ち明けた。石工室の重要性を強調して石工助手を1名採用してもらうことも約束した。この1カ月の間に机も椅子も本棚も 当面必要とするものはすべてスチール製の近代的備品に交替されて 新地質調査所は エクアドル国の期待をになって希望にみちた船出をしたといつてよからう。(筆者は北海道支所)



国立地質調査所長アドムンド・ラナス氏



新設の国立地質調査所